

三陸サケのフードシステムの構造変動

―地域漁業と地域経済を支えるサケ・マスふ化場からの視点―

地域太郎*・地域花子**

(*地域貢献大学・**地域社会研究所)

1 問題意識

日本で水揚げされるサケ・マスの大部分がシロザケ（以下、サケと呼ぶ）である。サケのフードシステムは、本来は、回遊してきたサケを親魚として捕獲し、採卵・授精、卵収容、発眼・ふ化、浮上・飼育して放流するところから出発している。ただ、河川に放流されたサケの種苗は海洋の自然変動の影響を受けながら成長し、それが来遊するのに2-8年（歳）かかる。漁獲するまで、平均すると4年以上の歳月を待たなければならない。そのため、ふ化放流を出発点にサケのフードシステムを議論することはなかった。

しかし、東日本大震災に被災した三陸水産業の復興への道筋を見通した時、最優先に取り組まなければならなかったのが、ふ化放流事業の再建であった（小川・清水, 2012）。復興過程において、漁業経営、水産加工・流通業などがいかにサケ資源に依存していたか、地域経済がサケのふ化放流事業の成否に大きく左右されていたかが再認識された。しかし、国内産のサケ・マス生産量は2003年の311.0千トンピークに減り続けている。市場ではチリやノルウェー産の養殖サケ・マスがシェアを伸ばした。国内産サケに対する需要は縮小し、市場価格は長期的に低下し続けている。サケの市場構造の変化は、三陸の加工・流通業、漁業経営を悪化させる一因であり、それが結果的にふ化放流事業の存立を難しくさせていた。

2 目的と課題

本報告の目的は、ふ化放流を出発点に成り立っていた国内サケ産業の循環性が、市場構造が変動するなかで、どのような脆弱性を抱えていたかを、ふ化放流事業の継続性という視点から明らかにすることである。具体的には、第1に、東日本大震災で被災した岩手県のサケ・マスふ化放流場の復興過程の特徴を明らかにする。第2に、事例分析をもとにふ化放流事業が抱える構造的な問題を明らかにし、第3に、国内産サケのフードシステムの今後の動向を展望することである。

参考文献

小川元・清水勇一 2012. 東日本大震災からの岩手県さけ増殖事業の復興と資源回復の課題、日本水産学会誌、第78巻第5号、pp.1040-1043

キーワード：経済循環、サケ産業、ふ化場の震災からの復興